博物館だより

和歌山県立博物館
WAKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM

No.25
2020.3

中学生・高校生と連携協力した博物館活動を世界へ発信！

令和元年（２０１９）９月１日から７日にかけて、博物館に関する国際組織であるＩＣＯＭ（国際博物館会議）の大会が、国立京都国際会館を会場に日本で初めて開催され、世界の１２０の国と地域から４５９０人の参加者が集まりました。和歌山県立博物館も会場内にブースを設けて、県立和歌山工業高等学校生徒と和歌山大学学生の協力により制作しているさわれる文化財レプリカや、県立和歌山盲学校と連携して制作しているさわって読む図録を紹介しました（写真１）。

大会期間中の９月５日にはオフサイトミーティング（会場を離れて各地に移動して行う視察・研究会）が行われ、和歌山県はＩＣＯＭの30ある国際委員会のうち教育・文化活動国際委員会（ＣＥＣＡ）を受け入れました。参加した約90人の世界の博物館研究者は、午前中に県立紀伊風土記の丘を見学したのち、午後には県立博物館と県立近代美術館を訪れ、県内の学芸員や中学生・高校生と交流の場をもちました。

県立博物館のエントランスホールでは、京都会場のブースでも紹介した３Ｄプリンター製文化財レプリカの制作方法について、県立和歌山工業高等学校産業デザイン科３年製の生徒８人が英語でプレゼンテーションを行いました（写真２）。会場には３Ｄスキャナーやパソコンも持ち込んで計測の実演も行い、その手慣れた作業に感心の声があがっていました。

２階の学習室では、県立博物館が中心になって進めてきた、地域に残る「災害の記憶」を発掘・共有・継承する活動の一環として、印南町立印南中学校生徒が行った校区に残る災害の記録の調査や、歴史資料の現代語訳、映像化などの活動について、３年生の生徒36人が出迎え、プレゼンテーションを行いました（写真３）。

これからも、地域の未来を担う中学生・高校生・大学生に支えられながら進めている和歌山県のユニークな活動を広く発信し、文化遺産を継承し活用する博物館の機能と意義の大切さを伝えていきたいと思います。

写真２　和歌山県立和歌山工業高等学校生徒による発表

写真１　ICOM京都大会会場ブースのようす

写真３　印南町立印南中学校生徒による発表

創建1250年記念特別展

国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史

10月17日(土)～11月23日(月・祝)

西国三十三所霊場の第三番札所として多くの参詣者を集める観音信仰の聖地、粉河寺。その名は、日本を代表する絵巻である、粉河観音の霊験を示した粉河寺縁起(国宝)によって広く知られています。縁起によれば、粉河寺は大伴孔子古により宝亀元年(770)に創建されたと伝えられ、令和2年(2020)はそれから1250年目の節目の年となります。

『枕草子』には寺は粉河と名が挙がり、後白河法皇の粉河観音への厚い信仰が知られるなど、都の人々にもその霊験が轟いた粉河寺は、観音信仰を基軸としつつ、葛城修験や禅宗法灯派との結びつきも知られるなど、重層的な信仰が織りなされてきた大寺院でした。

この特別展では、国宝・粉河寺縁起を全期間公開するとともに、粉河寺及びその周辺寺院に伝わる仏像・仏画など豊かな宗教文化を示す資料、寺領荘園の実態や村の人々の息吹を伝える中世の古文書群など多様な文化財を紹介し、粉河寺の歴史的実像を総合的に浮かび上がらせる初めての機会といたします。

千手観音立像　粉河寺蔵

国宝　粉河寺縁起　粉河寺蔵

粉河寺参詣曼荼羅　粉河寺蔵

風神坐像　粉河寺蔵

菩薩頭　粉河寺蔵

展示室の照明をLEDに改修しました！

県立博物館の展示室は、平成6年(1994)の新館開館以来、文化財への照明に適した蛍光灯とハロゲンライトを使用してきました。しかし、器具の老朽化が進むのと同時に、文化財への悪影響がより少なく、かつ経済的にすぐれたLED照明器具の実用化が全国的に進められるようになってきました。

そのため、県立博物館では壁付きケース内の照明・ダウンライト・スポットライトの全てをLED照明に改修し、あわせて配電盤と調光調色装置を更新することにしました。改修工事は、令和元年(2019)11月末から翌年1月31日まで、完全に閉館して実施され、2月1日の常設展・企画展再開にあわせて、運用を開始しています。

これまで、器具の老朽化でやや色温度が低く黄色っぽく見えていたのが、クリアな見え方に改良されました。どうしても壁面の照度をあげることができなかった光量不足が改善され、また展示資料の種類や傾向にあわせて、床面を中心とした工芸資料用の照明、壁面を中心とした掛け軸や屏風用の照明、全体的に照度を必要とする仏像用の照明など、さまざまな展示パターンにも特化して対応できるようになりました。

今後とも、展示資料の保全と来館者の快適な観覧を確保するために、照明計画を検討し続けるつもりです。

特別展

戦乱のなかの熊野 ―紀南の武士と城館―

4月25日(土)～6月7日(日)

多くの参詣者が訪れていた戦国時代の聖地・熊野。紀伊守護畠山氏、奉公衆山本氏、熊野水軍、熊野三山の社家勢力、堀内氏などが群雄割拠の状態にあり、戦国時代の熊野はまさに戦乱のまっただ中にありました。天正13年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めにより、紀伊国は一応平定されます。しかし、その後も熊野では一揆が頻発し、戦乱状態がしばらく続いていました。

この特別展では、戦国時代の熊野について、近年新たな発見が続く古文書や考古資料、現在残る城館遺構など、熊野で活動していた武士たちの城館群やその活動を紹介します。これまであまり注目されることのなかった新たな熊野の姿に迫りたいと思います。

勝山城から安宅本城跡を臨む

重要文化財　堀内氏善書状(熊野那智大社文書)　熊野那智大社蔵

四耳壺(藤倉城跡出土遺物)
和歌山県教育委員会蔵)

鉄砲玉(龍松山城跡出土遺物)
上富田町教育委員会蔵

瀬戸美濃系　天目茶碗(赤木城跡出土遺物)
熊野市教育委員会蔵

夏休み企画展

生誕200年記念 稲むらの火　濱口梧陵

7月18日(土)～8月23日(日)

濱口梧陵(1820～85)は、広村(広川町)で濱口家の分家に生まれ、12歳の時に本家の養子となり、銚子(千葉県銚子市)で家業である醤油業を継ぎました。

安政元年(1854)11月5日に安政大地震が起こったとき、故郷の広村に帰っていた梧陵は、被災した村民救助にあたり、道端の稲むらに火を放ち、この火を目印に、村人を広八幡神社へ誘導して多くの命を救いました。この実話をもとにしたのが「稲むらの火」の物語です。その後梧陵は、将来再び起こりうる津波に備えて大堤防の建設を計画し、安政5年に完成しました。堤防建設にあたっては、梧陵が私費を投じて村人を雇用することで被災民を救済し、津波で荒廃した広村の復興に大きな役割を果たしました。昭和13年(1938)に広村堤防は国史跡の指定を受けました。梧陵のこうした功績が認められ、平成27年(2015)国連総会において11月5日を「世界津波の日」と制定され、同30年(2018)には「百世の安堵～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～」として、広川町一帯の関連施設が日本遺産に登録されました。

生誕200年を記念して、この企画展では梧陵の生涯や事績を紹介するとともに、和歌山県の災害の歴史や先人たちが残した「災害の記憶」を紹介します。

◀国史跡
広村堤防

濱口梧陵

和歌山県立博物館が研究機関認定されました！

平成31年(2019)度より、和歌山県立博物館は文部科学省より、科学研究費補助金取扱規定第二条第一項第四号に規定する研究機関に指定されました。これにより、和歌山県立博物館では科学研究費補助金を受けることができるようになりました。今後、申請した研究課題が採択された場合には、科学研究費による調査・研究をおこなうとともに、その成果についても展覧会等で発信していく予定です。

2020年度の展覧会

常設展
きのくにの歩み
―人々の生活と文化―
4月1日(水)～10月4日(日)、12月5日(土)～3月31日(水)

三万年にわたるきのくに―和歌山県の歴史を、人々の生活と文化を主題として、七つのコーナーに分けて、時代の順にわかりやすく展示します。各コーナーには、「さわれるレプリカ」があります。なお、秋期特別展の開催期間中は、常設展示を行っておりません。

企画展
江戸時代の書
―きのくにの人びと　筆のあと―
3月14日(土)～4月19日(日)

江戸時代には、藩主・武士だけでなく、農民・町人に至るまで「手習い」＝書道教育の効果が及び、またそれを漢詩文などの作品に昇華することもよく行われました。この展示では、江戸時代・きのくにの人びとの書を紹介します。

特別展
戦乱のなかの熊野
―紀南の武士と城館―
4月25日(土)～6月7日(日)

聖地・熊野の舞台裏で、熊野三山の社家や熊野水軍など群雄割拠の状態にあった戦国時代の熊野。戦国時代に熊野で活動していた武士とその城館群について、古文書や出土資料、今に残る遺構などから、その実像を探ります。

企画展
紀伊田辺の画家　真砂幽泉
6月13日(土)～7月12日(日)

田辺の大庄屋の家に生まれ、京都で狩野派の絵を学んだ真砂幽泉。その絵画学習の過程がうかがわれる膨大な下絵類を、他機関研究者との2年間の共同調査に基づいて公開し、幽泉の魅力を紹介します。

夏休み企画展
生誕200年記念　稲むらの火　濱口梧陵
7月18日(土)～8月23日(日)

「稲むらの火」で知られ、広村堤防を築いた濱口梧陵。生誕200年の記念の年に、その生涯の事績を紹介するとともに、和歌山県の災害の歴史や、先人たちの「災害の記憶」などをたどります。

企画展
喜多村進と徳川頼貞
―南葵音楽文庫をめぐるひとびと―
8月29日(土)～10月4日(日)

南葵音楽文庫の司書であった喜多村進とつながりのあった徳川頼貞・島崎藤村・田山花袋らの資料をはじめとして、東京と和歌山における喜多村進の活動を、書簡や文芸作品などの資料で紹介します。

創建1250年記念特別展
国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史

10月17日(土)～11月23日(日)

粉河寺創建1250年の節目にあたり、日本を代表する絵巻物である粉河寺縁起（国宝）を公開するとともに、粉河寺と周辺の宗教文化や寺領荘園の実態を紹介し、今に法灯を伝える古代寺院の実像を浮かび上がらせる機会とします。

かつて室内を間仕切る調度品として使われた屏風には、絵画や書が表現されました。県立博物館には、さまざまな屏風の作品が収蔵されており、その中から江戸時代の注目すべき作品を紹介します。

企画展
屏風の美　―収蔵品の名品から―
12月5日(土)～1月24日(日)

高野山大学図書館の協力を得て、高野山で僧侶たちが学んだ経典や注釈書などの聖教・典籍類、縁起などの信仰に関わる各種文献などを展示し、信仰の聖地としての高野山とともに、僧侶たちの学びの場であったことを紹介します。

企画展
祈りと学びの山
―高野山大学図書館の名宝とともに―
1月30日(土)～3月7日(日)

企画展
きのくにの物語絵
3月13日(土)～4月18日(日)

きのくに―和歌山県には、寺社の成り立ちなどの物語を分かりやすく美しい絵で語る、絵巻物をはじめとするさまざまな作品が残されています。きのくにの「絵解き文化」に注目しながら、さまざまな物語絵の作品を紹介します。

お知らせ

◆主要な作品をイヤホン式ガイド機で解説する音声ガイドを用意しています（一般二〇〇円、高校生以下一一〇円）。常設展については、上級コース・外国語版（英・中・韓）もあります。

◆博物館では、学校行事での利用はもちろん、職場体験やミュージアムボランティア・教員研修など、学校と連携した教育・普及活動にも取り組んでいます。詳しくは当館学芸課までお問い合わせ下さい。またホームページにも案内を掲載しています。

URL　http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp

和歌山県立近代美術館（博物館となり）の展覧会

コレクション展 2020―春　特集「浜地清松」	4月25日(土)～6月21日(日)
もようづくし	4月25日(土)～6月28日(日)
コレクション展 2020―夏　特集「浜口陽三」	6月30日(土)～9月6日(日)
なつやすみの美術館10　あまたの先日ひしめいて今日	7月11日(土)～8月30日(日)
もうひとつの日本美術史―近現代版画の名作2020	9月19日(土)～11月23日(月・祝)
開館50周年記念　和歌山県立近代美術館　コレクションの50年	9月19日(土)～12月20日(日)
開館50周年記念　美術館を展示する	12月1日(火)～12月20日(日)
コレクション名品選	1月5日(火)～1月24日(日)

博物館の利用案内

開館時間　午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日　月曜日（祝休日の場合は翌平日）、年末年始。展示替えや改修工事にともなって臨時休館する場合があります。詳しくは博物館までお問い合わせください。

駐車場

入館者	2時間まで	無料
	以後30分ごと	100円

※大型バスでご利用の場合はお問い合わせ下さい。

交通

JR和歌山駅または南海和歌山市駅から「県庁前」（バス停）下車、徒歩2分

入館料

〈常設展・企画展〉

	一般	大学生
個人	280円	170円
団体	230円	140円

※高校生以下、65歳以上、障害者手帳の交付を受けている方（同伴者を含む）、県内に在学中の外国人留学生は無料です。

※企画展示室の展示替え期間中は常設展示のみとなります。

〈特別展　戦乱のなかの熊野〉
〈常設展示も行っています〉

	一般	大学生
個人	520円	310円
団体	420円	250円

〈特別展　国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史〉
〈常設展示は行っていません〉

	一般	大学生
個人	830円	520円
団体	680円	410円

まちなかの博物館・美術館をめぐろう！

和歌山市内5館（和歌山県立近代美術館、和歌山県立博物館、和歌山市立博物館、和歌山城天守閣、わかやま歴史館）の相互割引制度がありますので、是非ご利用ください。

和歌山県立博物館　博物館だより　第25号
編集　和歌山県立博物館
〒640-8137　和歌山市吹上一丁目4番14号
TEL（073）436-8670
http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp
令和2年（2020）3月発行